日本とマカオの交流は400年以上の歴史

教育旅行のデスティネーションとしても注目

教育旅行先としてのマカオの価値に注目が集まっている。豊富な歴史的素材に加え、高い安全性、親日的な環境、充実した観光インフラなど、教育旅行のデスティネーションとして求められる条件は十分に整っている。急速に発展する都市生活の一方で、今なお交易都市としての歴史が息づく街・マカオ。英語圏にはない、マカオ独自の魅力は、教育旅行先としての高いポテンシャルを持っている。

マカオ観光の中心となる「セナド広場」。夜でも人通りが途絶えず、ライトアップされた街を安心して楽しめるのもマカオの魅力だ

教科書の知識を実体験に 日本と関連の深い素材の数々

日本とマカオの交流の歴史は16世紀にまで遡る。マカオ経由で日本に渡来したポルトガル人は、鉄砲の伝来やキリスト教の布教をはじめ、多くの西洋文化を日本に伝えた。また、日本からも大量の銀や絹、磁器、工芸品などの交易品が輸出され、マカオの発展にも大きな影響を及ぼした。

「ルイス・フロイス」や「フランシスコ・ザビエル」といったポルトガル人の名前は、歴史の教科書でほぼ全ての日本人が知っているだろう。教科書では多くても1ページ程度の記載だが、マカオでは今なお、キリスト教を普及させた功労者として崇められ、関連する歴史的遺産が多いのに驚く。

コロアン島の先端付近にあるコロアン・ビレッジには、ザビエルを祀る「聖フランシスコ・ザビエル教会」（1928年建立）があるほか、マカオ半島の世界遺産地区にある「聖ヨセフ聖堂」には、ザビエルの右上腕骨とされる遺骨が展示されているなど、教科書上の歴史を実体験できる素材が数多くある。

ザビエル教会の中には宣教師が活躍した時代の様子も紹介されている

また、マカオ世界遺産のシンボルとして日本人観光客も多く訪れる『聖ポール天主堂跡』には、焼失した部分の地下に天主教芸術博物館と地下納骨堂が併設され、納骨堂には日本人キリスト教徒の殉教者の名前も刻まれているなど、日本との深いつながりを感じさせる。

宗教的な素材だけでなく、マカオには博物館や美術館が数多くあるのもポイント。マカオの歴史や伝統、文化を紹介する「マカオ博物館」をはじめ、交易の歴史や海洋文化が学べる「海事博物館」、日本とも関係の深い“孫文”関連のコレクションを集めた「孫文記念館」など、教育素材として利用価値の高い素材が多い。

とくに「海事博物館」では、マカオの海洋交流の歴史を紹介するだけでなく、ポルトガルと日本の間で行われた貿易の様子や、日本の歴史を紹介するコーナーもあり、日本人が興味を持って見学できるようになっている。博物館の近くには海の守護神「阿媽（アーマー）」を祀った「媽閣廟」もあり、海洋都市であるマカオのルーツを辿ることができる。

街歩きでマカオの魅力を 観光局の充実したサポートも

マカオの総面積は約29.2平方キロメートル。東京都世田谷区の約半分程度の面積しかない。コンパクトな街であるがゆえに、徒歩で観光スポットを巡ることができるのも魅力だ。とくに世界遺産が集中するマカオ半島は、バスで巡るよりも歩く方が効率は良い。治安や衛生面もしっかりとしており、教育旅行団体でも安心して班ごとのフリータイムを設けることができる。

マカオの街を実際に歩いてみると、東洋と西洋が融合した文化や急速に発展する街並み、それを支えるマカオ人の生活のエネルギーを肌で感じることができる。中国的な街並みの中に突如として現れるポルトガル様式の街角や、細い路地の先に見える巨大な建物群、所狭しと品物が並べられたマーケットの活気など、日本にはない生活感が溢れている。

入り組んだ路地を迷いながら歩くのも楽しいが、効率よく巡るのにマカオ観光局が推奨するモデルルートを歩くのもおすすめ。同観光局では『マカオを歩くウォーキングマップ』を無料で配布しており、各地区を2～3時間程度で巡れるモデルコースの紹介をはじめ、マカオの基本情報やグルメ情報、モデルルート以外にある観光スポットなどを網羅している。

また、各観光スポットの詳細情報をナレーションで紹介する『マカオを歩くオーディオガイド』（CD版）も無料で配布、デジタルプレーヤーなどにダウンロードすれば手軽に持ち歩くことができる。海外の自由行動では言葉の問題が大きな課題となるが、ウォーキングマップとオーディオガイドがあれば、日本人ガイドの同行なしにマカオ街歩きの魅力が堪能できる。

毎年5月に開催される「ドラゴンボートレース」。他にも魅力的なイベントが多数

交流体験可能な「IFT旅遊学院」 料理体験のプログラムも

海外校との交流体験も教育旅行で重要な要素となるが、マカオの『IFT旅遊学院』では各種交流プログラムを提供している。同学院は、観光スペシャリストの要請を目的に設立されたマカオ政府公認の大学兼専門学校で、ホテルマネージメントやツーリズムマネージメントを学ぶ学生が世界中から集まっている。

同学院では、半日キャンパス体験や観光に関する講演、学生同士の交流プログラムなどを実施しているほか、講義用のキッチンでマカオ料理の作り方を紹介する料理体験プログラムも提供している。料飲部門の専任講師がマカオ料理を代表する「アフリカン・チキン」などの作り方をレクチャーするもので、具材の下ごしらえから始まり、調理の仕方や味付けのポイントなどを紹介してくれる。具材の量などを記したレシピも用意してくれるので、日本に帰ってからマカオ料理にチャレンジすることも可能だ。

また、学院内には学生の実地研修を兼ねてレストランとホテルも併設しており、料理体験プログラムで学んだメニューをその場で味わうこともできる。レストランの味には定評があり、地元の人も多く通うほど。内装や雰囲気も高級レストランに引けを取らないほど充実しており、教育旅行での利用だけでなく、一般ツアーでも活用できるだろう。

同学院には現在約1000名の学生が在籍、日本人の講師も3名在籍しているという。基本的に学校のカリキュラムが優先されるため、各種体験プログラムはリクエストベースで受け付ける。

「一国二制度」を肌で感じる 一足のばして中国本土を訪問

マカオの魅力を堪能したら、一足のばして中国を訪れてみたい。マカオから中国本土へは、陸続きの關閘（クワンツァ）ルート、約5分程度の内港フェリーで渡る湾仔（ワンチャイ）ルート、コタイ地区から蓮花大橋を渡る横琴ルートの3つがあるが、このうち観光客でも簡単に利用できるのが關閘ルートだ。

關閘まではマカオ各地から公共バスのアクセスがあるほか、一部のホテルからは無料のシャトルバスも運行している。關閘では、まずマカオ側のパスポートチェックを行い、その後に歩いて中国とマカオの境界を越える。中国側でもう一度パスポートチェックを受ければ、中国へ入国したことになる。出入境審査場が混んでなければ10分程度の所要時間だ。日本国籍者で15日以内の滞在であれば中国のビザは不要。

中国側の玄関口である拱北（ゴンベイ）には、とくに見所となる観光スポットはないものの、マカオとは一変する街並みや雰囲気を体験するだけでも楽しめる。

1999年のマカオ中国返還から10年。世界でも珍しい「一国二制度」の特徴を知るには格好の素材だ。パスポートにも出入国のスタンプが捺され、旅の記念にもなるだろう。

中国側から見た拱北の出入境審査場。地下には巨大なショッピングアーケードがある

日本とマカオを結ぶ2つの翼 成田・関空から ダイレクトアクセス

マカオ航空
～関空からマカオへ毎日運航～

2007年に週2便で関空－マカオ間の定期便運航を開始したマカオ航空。2008年7月には週7便のデイリー運航に拡大し、マカオへのアクセスで大きく利便性を高めている。

同航空では今年5月10日からスケジュールを変更し、日本からの往路（NX837便）はマカオ着20時00分に変更、以前はマカオ到着が23時55分と深夜だったことから、到着後のホテルへのアクセスも便利になっている。また、東京（羽田）からアクセスする場合でも、関空到着が15時30分となったことで、国内線に乗り継いでも早い時間帯に羽田到着が可能になっている。

関空－マカオ間はエアバス321型（ビジネスクラス16席、エコノミークラス162席）、または同319型で運航、機内食をはじめフルサービスを提供する。

来年3月の成田空港第2滑走路延長後は、成田－マカオ間の定期便就航も計画している。

ビバマカオ航空
～クルーのホスピタリティが魅力～

マカオで2006年に誕生したビバマカオ航空は、2007年12月から成田－マカオ間に就航、現在プログラム・チャーター便として週2便（水・土曜日）を運航している。

同航空は“必要なサービスを必要なだけ提供する”をコンセプトに、機内でのサービスを完全に有料化。機内食（50HKドル）や飲み物（10HKドル～）、ブランケット（40HKドル）等を有料とすることで、魅力的な運賃価格を実現している。とくに客室乗務員のホスピタリティ精神は特筆すべきもの。笑顔とフレンドリーな応対は、心地よいマカオまでの移動時間を提供してくれる。日本路線には日本人客室乗務員も搭乗、言葉の面でも安心だ。

現在、成田線の機材はボーイング767型機を使用、プレミアムクラスとエコノミークラスの2クラス制を採用し、プレミアムクラスでは食事やドリンク類を無料としている。今年1月から個札限定販売（エアオンリー）も開始、首都圏からのアクセスで高い利便性を提供している。